九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

マンガを素材とする異文化理解教育の方法開発

因，京子
九州大学留学生センター助教授

日下，みどり
九州大学比較社会文化研究院教授

松村，瑞子
九州大学言語文化研究院教授

https://hdl.handle.net/2324/16817

出版情報：日下翠教授中国文学・漫画学著作集成，2005-03
バージョン：
権利関係：

日本語のジェンダー表現と話法

松村　瑞子（九州大学大学院言語文化研究院）

1　序

アメリカの言語学者 Haas(1944)は、アメリカ・インディアンの言語コアサティ語の文法記述を行い、この言語では男性と女性で規則的に異なる形態をもつことを発見した。以下がその規則である。

(1)　A　男女の発話の違いを支配する規則

1　女性の形態が母音で終わるときは、男性も同じ形態をとる。

2　女性の携帯が[č]で終わるときは、男性も同じ形態をとる。

3　女性の形態が鼻音化した母音で終わるとき男性の形態はその鼻音の代わりに[s]をとる。

4　女性の形態が語末音節で下降ピッチストレスをもつ[l]を伴う短母音で終わるとき、男性の形態は高ピッチストレスをもつ[s]を伴う短母音となる。

5　女性の形態が語末音節で下降ピッチストレスをもつ[n]を伴う短母音で終わるとき、男性の形態は下降ピッチストレスではあるが[s]を伴う長母音となる。

6　上記の規則以外の状況で、女性の形態が長短母音＋１つか２つの子音で終わるとき、男性の形態は[s]を加える。

B　女性の発話は男性のそれより幾分古語的と考えられている。

彼女はさらにコアサティ語に限らず男女で絶対的に差のある言語についての調査をすすめ、絶対的に性差を含む言語には、タイプ I 話し手の性によるもの、タイプ II 聞き手の性によるもの、タイプ III 話し手と聞き手の性によるものの 3 タイプがあるとした。

日本語についても、話し手の性に応じて自称詞や終助詞に、聞き手の性に応じて対称詞に、明らかな性差が見られる言語（タイプ３）であるとされて研究が進められてきた。しかし、近年の調査（『女性のことば・職場編』『男性のことば・職場編』）によると、日本語において男性専用・女性専用とされる形式は少なくなりつつあるという結果が出ている。

日本語において男性専用・女性専用とされる文法形式が次第に用いられなくなっているということは事実であろうが、なかなか死なない男女差もある。その１つが、引用表現に見られるジェンダー表現である。鎌田（2000: 47/53-54）は（2）の例を挙げながら、日本語の引用表現は必ずしも発話を直接的に引用しているわけではないという。

(2) 男性の伝達者がその奥さんの発話を周りにいる男性の同僚に報告している。

そうなんだよ、ほれ、これ、わかめのぬたっちゅんだろ。これが食いたくてね。作れってっても、このすみその具合が｛(a)分からねえ (b)？分からないのよ (c)？分かんないわ｝って言うんだよ、うちのやつは。　（鎌田（2000）: 47/53-54）

この奥さんの実際の発話であろう（b）か（c）の表現は容認されないのに、男性の発話形式に変えた表現（a）は容認されることが分かる。

ここで注意しなくてはならないのは、これがしばしば起こるのは男性が女性の発話を（取り分け男性の聞き手に）引用して聞かせる場面であって、男性の発話を引用する場合には起こりにくいということである。男性の発話を引用する場合には、わざわざそれを女性語に変換させて引用するということは起こらないのである。以下に例示されるように、男性の発話(a)を女性語に変換させた発話(b)は、男性ではなく女性の発話と解釈されてしまい、このコンテクストでは容認されない。

（3）　男性が男性（父親）の発話を引用

山川：家に帰ってくると思い出したようにやるんですよ。「(a)何でとれなかったんだ！
(b)？何でとれなかったのよ！」ってね。

（テレビ朝日「徹子の部屋」黒柳徹子・山川豊）

（4）　女性が男性（教師）の発話を引用

女子学生：よく先生とかにも、「(a)やって半年で受かろうなんて、甘いよ、きみー。
(b)？やって半年で受かろうなんて、甘いわよ、あなた。」って。

男性教師：そう、そうだろうな。　（大学の研究室での会話）

日本語のジェンダー表現は少なくなりつつあるが、完全に消え去ったわけではないことが分かる。

この論文では、先ず日本語における男女差の現状について概観する。次に、ことばの多様性という観点から日本語の男女差について考察していく。最後に、引用節中のジェンダー表現について考察していく。

2　中性化しつつある男女差

この節では『女性のことば・職場編』、『男性のことば・職場編』を中心に、日本語における文末表現・疑問表現の男女差の現状について簡単に見ていく。

尾崎(1997)は、職場で働く女性が、女性専用とされてきた文末形式（「わ」、「わよ」、「わね」、「だわ」の使用、「だ」の不使用等）をどの程度使っているかを数値化して示した。その結果、終助詞「わ」の使用については、男性による使用は皆無であるため現在でも女性専用の形式ではあるが、女性についてもあらゆる年齢層でその使用率は低く、現在は衰退しつつある形式であるとした。次に「だ」の使用率については、男性が80%と高いのに対して女性は28%であり、男女差のはっきりする形式である。しかし、特に30代以下の世代については「だ」をつける女性も次第に増えてきている。さらに、「だわ」の使用については、男性のみならず女性の使用も皆無に等しく、ほとんど死語に近い。これらのことから、尾崎(1997:57)は、終助詞「わ」のように女性であることを積極的にマークする形式は衰退に向かっていると結論づけた。

遠藤(2002)は「男性のことばの文末」において、男性の用いる終助詞、助動詞、形容詞、

応答詞・感嘆詞・あいさつ語のような文末表現を、女性のそれと対照させながら調べた。その結果、「ぜ」「ぞ」のような男性専用と言われている終助詞の使用は減ってきている(「ぜ」は1062例中1例、「ぞ」は0例)こと、「あら」「のよ」「わ」のような女性専用と言われている語の使用も観察された。遠藤は、これより文末表現でみる限り用語の性差は極めて少なくなっているとした。

中島(2002)は、疑問表現についても、女性が主として使うとされてきた疑問表現「(な)の↑」「名詞+ね↑」「よね↑」「ですよね↑」「ますよね↑」「ないの↑」「(ん)でしょ↑」「(ん)じゃない↑」「じゃないの↑」の男性使用が増加したこと、また男性が主として使うとされてきた疑問表現「かな↑」「(ん)だよね↑」「だね↑」の男女使用率に殆ど差がなかったことから、これらの表現は男女共通に使う中立的疑問表現の方に移行しつつあることを示した。男性が主として使うとされた疑問表現「な↑」「だな↑」「よな↑」「(ん)だよな↑」「か↑」「かね↑」「ね↑」「だろう↑」「だろーな↑」「じゃないんだな↑」については未だに男性専用の疑問表現であるが、女性専用とされてきた疑問表現「かしら↑」「わね↑」「わよね↑」「のよね↑」の使用は一例も見つからなかった。これより中島(2002)は、女性専用、男性専用という枠組みでの分析自体が無意味になってきているという。

これらの研究の結果より、文末表現や疑問表現について言えば、男女差は小さくなってきていることが分かる。しかし、これらの表現については差が小さくなってきていることを認めてもやはり、明らかな差は残っているように思える。その典型的なものが、自称詞・対称詞の用法である。次節では、小林(1997)に基づき、自称詞・対称詞の男女差について見ていく。

3　ことばの多様性

小林(1997)は、女性の初話8856例、男性の発話2361例における自称詞(「わたし」、「あたし」、「おれ」、「ぼく」)、対称詞(「あなた」、「あんた」、「おまえ」、「きみ」、[名字・名前]+敬称・役職名)の用法の実態を調査した。その結果、自称詞については、女性では「わたくし」8例以外は「わたし」「あたし」のみが用いられ、男性では「わたし」「ぼく」「おれ」だけが用いられていた。また、自称詞の出現率は、女性が約2.98%、男性が約1.87%と、女性の方がやや自由に自称詞を用いていた。

女性専用と言われる「わたくし」「あたくし」がほとんど見られなくなっており、「わたし」と「あたし」が年代を問わず多くの女性に併用されていた。その使い分けについては、「わたし」がどちらかというとフォーマルな場面で使われ、「あたし」はほとんど見られなくなっており、「わたし」と「あたし」が年代を問わず多くの女性に併用されていた。その使い分けについては、「わたし」がどちらかというとフォーマルな場面で使われ、「あたし」はインフォーマルな場面で使われるが、この場面による使い分けと文体の丁寧度とは必ずしも合致していない。即ち、「あたし」については常体で用いられやすいという傾向はあるが、「わたし」では常体と共に用いられるものも71.3%とかなり多く、会議などのフォー

マルな場面でも常体で行われる発話の割合が大きい。

男性では「わたし」「ぼく」「おれ」が用いられているが、女性と違って2つ以上の自称詞を使い分けている話者は少なく、固定した一語が自称詞として用いられる傾向がある。また、「おれ」は殆ど常体と共に用いられる一方、「わたし」は殆ど「です」「ます」と共に用いられており、女性の「わたし」と違ってフォーマルな語と意識されて使われていることが分かる。

対称詞については、「あなた」「あんた」「おまえ」だけで、しかも使用例は少ない。「あなた」は全て女性が同年代または下の年代に対して用いている。「あんた」については下の世代に対してのみ用いられ、「です」「ます」と共に用いられることはない。「おまえ」は男性によってのみ用いられ、待遇的には「あんた」とほぼ同じ段階にある。また、敬称・役職名を含む対称については、女性の方が男性より特にインフォーマルな方向に自由に言葉を選んでおり、語数も語種も男性より多様であるという結果が出ている。

現在でも男女の差がはっきりしている自称詞については、男性では「わたし」「ぼく」「おれ」の中の固定した一語だけが用いられているのに対し、女性では「わたし」(フォーマルな場面)と「あたし」(インフォーマルな場面)が年代を問わずに多くの女性に併用されており、女性の方がやや自由に自称詞を用いていることが分かる。さらに、敬語の用法については、女性は丁寧度の高いものから低いものまで多様なレパートリーをもっており、それらの多様な言語形式を場面や相手に応じて使い分けているということが分かった。

井出他(1985)は、女性の方が男性より敬語をより多く使用しているという先行研究(F.C.パン編『日本語の男女差』等)の結果を踏まえ、何故女性は男性より丁寧な言語表現を用いるのかを解明しようと、2種類の調査・分析(面接アンケート調査およびその分析、文字化された実際の発話資料の分析)を行った。

面接アンケート調査では、働く男性と働く女性と主婦を比べると、働く男性と働く女性の言語使用パターンにより多くの類似が見られること、即ち言語形式の男女差は性差より社会での役割の差から生じていることが分かった。また大学生の娘をもつ49歳の主婦の1週間の会話の録音資料では、この女性が非常に高い丁寧度から非常に低い丁寧度の言語形式までの多様なレパートリーをもっていること、場面や相手が異なると使われ方のパターンも異なるが、同じ場面・同じ相手に対しても異なった丁寧度の言語表現が用いられており、固定した使われ方のパターンとしては捉えられないということが分かった。井出他は、上記の結果を踏まえ、女性が高度に丁寧な言語表現を用いて話すのは、必ずしもそうすることを強いられているためではなく、自ら選択してそうしているという解釈もできるとした。

自称詞・対称詞や敬語の用法についての研究結果から言えることは、女性の方が男性より多様な表現形式を使い分けているということである。次節で述べるように、引用節中のジェンダー表現についても、女性の方が多様な形式を使い分けていることが分かる。

4　引用節中のジェンダー表現

序説で述べたように、引用説中のジェンダー表現は、男性の発話を引用するか女性の発話を引用するかで異なっている。男性が女性の発話を引用する時のみ、制限がかかるのである。男女に関する引用については、(A)男性が男性の言葉を引用する場合、(B)男性が女性の言葉を引用する場合、(C)女性が女性の言葉を引用する場合、(D)女性が男性の言葉を引用する場合の4タイプがある。以下が各々のタイプの例である。

(A) 男性が男性の言葉を引用する場合

(5) 山川：そしたら会社の方に電話がかかってきて、「船村先生の電話番号調べろ」って言うんですよ。

黒柳：お兄様が？

山川：「どうしたんだ」「とにかく調べろ」で、今度は「船村先生どこにいるか調べろ」って言うんですよ。「そんなもん知らない」って言ったんですよ。

(テレビ朝日「徹子の部屋」山川豊・黒柳徹子)

(6) 西村：そしたらね、ある先生がいらして、「西村君見てるよ」って、「あ、有難うございます」、そしたら「印籠僕に貸さんかね？」って言うの。で、「お貸ししてもいいですけど、あれ悪いことに使われると困るんでやめときます」って言ってやったの。 (テレビ朝日「徹子の部屋」西村晃・黒柳徹子)

(B) 男性が女性の言葉を引用する場合

(7) 宝田：…まあ、感激の対面があろうと思って、えー家遅くかえっ、撮影が終わって帰ってまして、姉さんっちって抱きつこうと思ったけれども、もう姉はもう、あー、なんかそれを、こうはねのけるようにねー、うー「あなたは、役者やってるんだ」ってね、「映画俳優なったんだ」って、「よかったね」って、そう言われてしまったんで、プツッとその、うー、なんか感情、はーこれ相当苦労してきた人なんだなってフッと思いましたね。(テレビ朝日「徹子の部屋」宝田明・黒柳徹子)

(8) 篠山：ん、あと森洋子さんにいたってはねえ、もうあのー、亡くなられるのが自分でも分かってたから、もう癌で亡くなられるのが分かってたから、写真を取り寄せて、自分でトリミングしてましたからね。そして「これを使ってくれ」 って言われましたからね。

黒柳：まあ、とっても美意識の高い方だとは知ってたけど、そう。

(テレビ朝日「徹子の部屋」篠山紀信・黒柳徹子)

(9) 男性の伝達者がその奥さんの発話を周りにいる男性の同僚に報告している。

そうなんだよ、ほれ、これ、わかめのぬたっちゅんだろ。これが食いたくてね。

作れってっても、このすみその具合が分からねえって言うんだよ、うちのやつは。

(鎌田 (2000)：47)

(C) 女性が女性の言葉を引用する場合

(10) 野沢：手振ってたら、「野沢さん、野沢さん」ってあんまり言うんで、前に行って「何なのよ」って言ったら、「前のファスナー開いてます」って言うの。ファスナ

一開きっぱなしで、そいで、「えー、いけない」って言ったら、皆が「どうしたの」って、出てる人に、「ファスナー開いてたの」、ピンマイクっての忘れちゃったんですよ。

（テレビ朝日「徹子の部屋」野沢雅子・黒柳徹子）

(11)　黒柳：「磯野貴理子さん」って言ったら、「あの人武双山が好きだわよ」って言ってたわよ。　（テレビ朝日「徹子の部屋」磯野貴理子・黒柳徹子）

(D) 女性が男性の言葉を引用する場合

(12)　黒柳：でも、あなたはあれでしょ、タモリさんのに出た時に、

磯野：最初「19歳です」ってやってたんですけど、妹が「笑っていいとも」の東 京に来てたんですね。であの、「妹いくつだ」って言うから、「ええ20歳です」私19って言ってて、20、「あっしまった」と思って、「妹が20歳で、お前19か？お前一体いくつだ」って言われて、「22です」って、また嘘ついちゃったの。

(13)　磯野：…「渋滞していたらロバの人だから」って。って言っているうちに、「おい、どうした」って言って、このトラックに乗ったおじさんがやってきました。「あなた、どなたですか？」って言ったら、「おれはこの＊＊で有名な中里だ」って。この人は「この辺のこと何でも聞いてくれ」って言うの。聞いたら「俺は今日11時頃見かけた」って。　（フジテレビ「遅くおきた朝は」磯野貴理子）

(14) A大学教師（46歳女性）・B大学教師（42歳女性）・C大学教師（40歳男性）の間で行われた雑談

A：…それとか、こうやって真面目に見る人もいて、「なんか嫌だなあ、この視線は」って思って、ほんで準備運動して「さ、始めよう」って言ってもなかなか動き出さないんだけども、やりだしたら今度「終わんなさい」って言っても終わらないの。…

(15) 30歳半ばの女性の発話

（子供の頃私は）「お前は下品だ」とおばあちゃんに言われどうしでした。

（鎌田（2000）：57）

男性が男性の発話を引用する時(5)(6)、女性が女性の発話を引用する時(10)(11)、または女性が男性の発話を引用する時(12)(13)は、何れも元発話者が発話したように引用を行う直接話法的な引用が普通である。

一方、男性が女性の発話を引用する場合は、女性専用と言われている表現を極力避けた(7)のような男女共用の表現を用いることが多い。また、さらに一歩進んで、(8)(9)の例に見られるように、実際には使われていないであろう男性専用と言われている表現を、わざわざ女性の発話引用に用いることもある。(9) は同僚の前で少々強がった話し方をしている話者が、妻の発話をも自分自身の荒っぽい言葉遣いに合わせて表現している。また (10) については、亡くなる前に自分の写真を取り寄せトリミングした後、写真家にそれを持っ

ていった気丈な女性の凛とした言葉を、恐らくは無意識のうちに男性専用と言われている言葉で表現したものと考えられる。また興味深いのは、(14)(15)に例示されるように、女性が女性の発話を引用する時も、引用される女性の発話の厳しい調子やぞんざいな言い方を表現するのに、男性専用と言われている表現が用いられることがある点である。男性が引用するにしろ女性が引用するにしろ、上で述べたような効果を狙って、女性の発話を男性専用と言われている表現に変化させて引用することはしばしば起こりうるのである。

それに対して、男性が女性の発話を引用するときに明らかに女性専用と考えられる表現は、何らかの意図をもって使われていることが多い。例えば(16)では、女性専用の表現を用いなければ、下線部の妻の発話を破線部の夫の発話から区別することはできないであろう。また(17)では、「夫に助けてもらった女優」と「ワニに助けてもらった自分」を対照させることで、夫である話者に対して嫌味を言っている妻の言葉を、「演技」のように真似することで、自分が惨めな立場にいるということを示そうとしているのである。また(18)では、自分が風邪をひいたかどうかすら認識していない無頓着な女性を皮肉るために、故意にその女性の話し方を真似ているのである。

(16) 篠山：で、そしたら、あのー、ご主人がいらして、「全然写真がないのよ」って言うから、「じゃ一緒にとりましょうよ」って言ったら、「いやいやいや」って言うんですよ。だけど「これは使わないからね、もうせっかくだから、あのま、出前の写真屋が来たと思って、ちょっと撮りましょう」って言って、それで、それ結果的にはすっごく、あれ貴重だったんですね。

(テレビ朝日「徹子の部屋」篠山紀信・黒柳徹子)

(17) 風見：…で、今旦那さんでいらっしゃいます唐沢さんが助けたって、で、それで、「いいわよね、旦那さんが助けてくれるっていう家はいいわ。あたしの家助けてくれたのワニよ」って、はい、だんだん嫌味を言われていますけど。

(テレビ朝日「徹子の部屋」風見慎吾・黒柳徹子)

(18) 小学校の職員室での会話

タブチ先生：ハークション！

藤原先生：あらタブチ先生、まだカゼなおらないんですかあ？

タブチ先生：もう花粉症なんです。

藤原先生：あらー。また花粉症ですかあ？

タブチ先生：毎年あらためてなるもんじゃないんです。カゼひいても気がつかずに、わたしカゼひきませんのよ、なんて人にはわかりません。

(いしいひさいち「ののちゃん」2768)

また、序説において示したように、女性の発話を男性専用と言われている表現で引用することはあっても、男性の発話を女性専用と言われている表現で引用することはない。

(19) 男性が男性(父親)の発話を引用

山川：家に帰ってくると思い出したようにやるんですよ。「(a)何でとれなかったんだ！(b)？何でとれなかったのよ！」ってね。

(テレビ朝日「徹子の部屋」黒柳徹子・山川豊)

(20)　女子学生が男性教師の発話を引用

女子学生：よく先生とかにも、「(a)やって半年で受かろうなんて、甘いよ、きみー。

(b)？やって半年で受かろうなんて、甘いわよ、あなた。」って。

男性教師：そう、そうだろうな。　　（大学の研究室での会話）

これらの例から言えるのは、言葉の使用について制限がかかっているのは寧ろ男性話者の方だということである。女性の場合は、女性的表現、男性的表現、中性的表現を使い分けることが自然にできる。一方男性の場合は、女性の発話を引用する際に、そのままの形では引用しにくいのである。このことが、第3節でも示したように、女性の方が多用な表現形式を使い分けているということに繋がっていく。

5　結論

この論文では、話し手・聞き手の性によって変化すると言われている日本語の男女差の現状、また現在でも残っている男女差について論じた。先ず、典型的に日本語の男女差が表れるとされている文末表現や疑問表現について、先行文献を参照しながら、これら表現の男女差は次第に小さくなりつつあることを示した。次に、現在でも男女差が残る自称詞・他称詞や敬語の用法については、女性の方が男性より多様な表現形式を使い分けているということを示した。最後に引用節内のジェンダー表現については、男性が女性の発話を引用する時にはしばしば制限がかされるため、制限の少ない女性の方が多様な表現形式を使い分けていることを示した。

井出祥子(1997)は、Silverstein(1976, 1987)による言語機能の考え方、即ち「言語の機能には指示的機能（意味を言語の記号とそれが指示するものの関係とし、指示的意味として捉えられる命題を伝達することを言語の主たる機能としてきた)の他に非指示的機能(話し手が社会において性別や人間関係がどうであるかについてしるしをつける機能)があり、話し手はそれを使うことによって自分のアイデンティティーを作り上げる」(11) という考え方を引用しながら、日本語の女性語や敬語は、この言語の非指示的で指標的な機能と捉え方でみるとうまく説明できるとした。

この論文で取り上げた引用節中のジェンダー表現についても、Silverstein の考えで説明ができる。即ち、男性は引用する女性の発話についても自らの男性としてのアイデンティティーを作り上げるために、その使用を制限せざるをえない。一方、女性は女性語のみならず男性語も用いることができるため、その言葉は多様性を獲得することができた。

R. Lakoff (1973)は、女性が社会的に低い地位におかれていることは言語表現に顕著に表れているとした。彼女によると、女性が女言葉を使用しなければならないのは社会的に低い立場におかれているからであり、女に関する言葉のもつ性差別的な含みは、社会的処遇における女性蔑視を反映するものとした。しかし、ここで調べたジェンダー表現について言えば、女性は女言葉の使用を制限していないため、より多様な言語表現を用いることができているとも言える。

【参考文献】

遠藤織枝. 2002.「男性のことばの文末」『男性のことば・職場編』33－45. ひつじ書房.

Haas, Mary. 1944. "Men's and Women's Speech in Koasati." *Language* 20, 142-49.

井出祥子他. 1985.『女性の敬語の言語形式と機能』 文部省科学研究費研究成果報告書.

____. 1997.「女性語の世界—女性語研究の新展開を求めて—」『女性語の世界』1－14. 明治書院.

鎌田修. 2000.『日本語の引用』ひつじ書房.

小林美恵子. 1997.「自称・対称は中性化するか」『女性のことば・職場編』113-37. ひつじ書房.

Lakoff, Robin. 1973. "Language and Women's Place." *Language in Society* 2, 45-80.

レイコフ・ロビン. 1990.『言語と性—英語における女の地位』かつえ・あきば・れいのるず訳. 有信堂.

松村瑞子＆因京子. 1997.「日本語におけるスタイル交替の実態とその効果」『言語科学』33, 109-18.

松村瑞子. 2001.「日本語の会話に見られる男女差」『比較社会文化』第7号. 69－75.

_____. 2001. 「日本語の女性語 —女性語＝劣性の言語か—」『韓日言語文化研究』第2巻, 117-29.

中島悦子. 1997.「疑問表現の様相」『女性のことば・職場編』59－82. ひつじ書房.

_____. 2002.「職場の男性の疑問表現」『男性のことば・職場編』47－61. ひつじ書房.

尾崎義光. 1997.「女性専用の文末形式の今」『女性のことば・職場編』33－58. ひつじ書房.

桜井隆. 2002.「「おれ」と「ぼく」」『男性のことば・職場編』121-32. ひつじ書房

Silverstein, Michael. 1976. "Shifters, Linguistic Categories, and Cultural Description." *Meaning in Anthropology,* K. Bass and H. Selby (Eds.), 11-55. Alburquerque: University of New Mexico Press.

____. 1987. "The Three Faces of 'Function': Preliminaries to Psychology of Language." *Social and Functional Approaches to Language and Thought,* M. Hickmann (Ed.), 17-38. Orlando: Academic Press.